
ルーヴのアイルシオン

空猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーヴのアイルシオン

【Nコード】

N1439M

【作者名】

空猫

【あらすじ】

幻想世界サミンス。そこには、世界と世界を紡ぐ召喚術が存在する。

それを操る召喚師の卵を育てる学校、聖フォース召喚魔法学校の二年生、ルーヴは、最終試験にて初めての召喚を行う。が、そこでルーヴが召喚したのは、なんと幼馴染のミコだった！！

！
ドタバタ後ラブラブ時々シリアス！青春学園ファンタジー開幕！

ブローグ？

チィチィと、小鳥のさえずりが聞こえる。足元にはホワホワとした、生きてるあったかさ。そんな穏やかさにに包まれて、ボクの意識はうつらうつらついていうか、ユラユラついていうか、フワフワついていうか…つまり、あっちへ行ったりこっちに行ったり漂っている。

「ル．．．」

んん…。待つてよお。…あと、十分。…んん、五分でもいいからあ…

「ルー．．」

…じゃあ、三分。…うう、一分だけでも…。…ああ、揺らさないでよお。

「ルーヴ！」

「んう？」

大声に驚いて、肩に止まっていた小鳥は飛び立ち、足元にじゃれついていたわんちゃんが、不思議そうに声の主を見上げる。

ボクの意識をガシッとわしづかみして引っ張り上げたのは、目の前の白い振り袖と赤い袴——こういうの巫女装束っていうんだっけ？—の女の子だった。

「…んう、おはよう。ニコ。…おやすみ。」

「こ、こらあっ！起きなさいっ！」

「やだあ……。こんな素晴らしいうたた寝日和に居眠りしないなんて罪だ……。罰あたりだあ……。」

「ダメっ！もう始まつちゃうんだから。それに間に合わない方が重罪でしょっ！」

「……でも、午後からでしょお。」

「もう午後だよ！あと、一時間で始まつちゃうよ！」

「なあんだ。じゃあ、まだ三十分くらい大丈夫。……おやすみい。」

「復習しないといけないでしょおっ！！」

ボクの安らぎタイムに土足で上がってグーの手を上下にブンブン振っている、茶色のセミロングボーイッシュヘアのこの子は、ミコ＝ニーテイル。すっごく優しく、その倍以上に「ボク視点からは」可愛くて、ボクよりずっとしっかりした、ボクの幼馴染。

にしてもさあ。ボクくらいのお年頃では睡眠ってのは大切なんだよあ？特にボクは背が低いから、こうやってしっかり居眠りして体を作らないと、……屁理屈だっ？……まあ、否定はしませんよ。

「とにかく、行こ？」

「わわっ！」

ん。起きたたてで頭がまだ完全に起動しきってないけど、現在の語り手はボクみたいだから解説しないよね。

ボクたちが暮らすこの世界―サミンスって言うんだけどね―には、世界と世界を紡いで、異世界の住人と契約する魔法が存在するんだ。召喚術って言うんだけどね。そして、今、ボクとミコが走っているのは、「聖フォース召喚魔法学校」の中庭。ボクとミコを含む、この学園の皆は召喚術を操る召喚師の卵ってわけだね。

…あ。まだ自己紹介してなかったっけ？ボクはルーヴ。ルーヴ＝バルドネス。聖フォース召喚魔法学校2nd（二年生）。チャームポイント…って、ミコが言ってくれてるのは、ストレートセミロングのド真中に、「なんかアンテナ」みたいに曲線を描いてハネた桃色の髪。以後よろしくね？

で、始まっちゃうつてのは、2ndの最終試験。

ここに入学してから1stの一年間は、召喚の基礎知識を学んで、2ndでは、Cクラス召喚の基礎知識を学んだ。それで、2ndの最後の月に、最終試験としてCクラスの召喚獣を召喚するわけ。まあ、試験っていつても、今まで落ちた人はいないんだけどね。っていうか、中にはいきなり格上の召喚獣を呼ぶ人もいるんだってさ。今、ボクの手を引っ張っているミコは、ボクの100倍くらい頭いいから、きつとBクラスを召喚出来ちゃうだろうね。…ボク？ボクは人当たりはいいけど、頭は空っぽだから、絶対に無理だと思うよ。むしろ、初めての落第者にならないか心配なくらいだね。

ブローグ？

「…うゝみゆ。」

教科書とにらめっこしながら、ボクはうなつた。

試験は、特別教室で一人ずつ行われて、大体3〜5分くらいかかるんだ。んで、ボクは最後の方だから、今、15分くらい時間が有るわけ。その時間を有効活用して、ミコのアドバイス通り復習してるんだけど…。

「参ったなあ…。」

「召喚獣の基礎」とか「次元の成り立ち」とか「因果律の操作」とか、2年かけて学んだはずの知識は、いつの間にかシュレッターにかけられてゴミ箱にポイされちゃったみたいで…。…ああ、ミコの言うとおりで。きつとこれは、学問の神様からの罰なんだ（責任転嫁）。

…ミコ？ああ、ミコはちょうど今試験を受けてるよ。まあ、何も心配することなんか…あ、噂をすれば…。

「どうだった？」

…なあんて、聞かなくても満面の笑みを見ればわかるんだけどね。きつと、ミコは…

「ルーヴ！わたしね、Bクラスを召喚出来たのー!!」

でしょうね。

「うわぁ！すごい！やったね、ミコ！」

「エへへへへ…♪」

そういう笑顔は、褒められた子犬みたいで。破壊力あるなあ。もしくは最上級回復魔法？

「ルーヴは？大丈夫そう？」

はうあっ！極限の癒しの後の垂直落下ブレインバスター！会心の一撃なり。

「えっ？…う、うん。大丈夫…かなあ？」

「「ルーヴ」バルドネス。」

ああああ。来ちゃったよお…

ボクは仕方なしにこわばる笑顔でいつてくると、戦場に向かう兵士ばりにミコに言って、特別教室に向かった。

「おしつ、ルヴ！よくぞ来た！」

このオレンジ色のスポーティーな髪形の先生は、コロナ・クリームラッド先生。3rdからの緋色のクラスの先生で、28歳なのに教頭を務めている、スゴい先生なんだって。

「いいか！ルヴ！お前は真面目に授業を受け、進んで努力を重ねたんだ！だから、な？出来る！お前は！先生は信じているぞ！」

あつついねえ。ボクは好きだけど。…ただねえ、こういう状況でこの熱さは逆によろしくないのでございますっ！

「よし！いこう！」

……あああああ！もういいや！後は野となれなんとやら。だっ！

なんて投げ槍に投げて、ボクは魔法陣の中央に立ち、詠唱を始めた。

『世界サミンスより告ぐ。我、律するものなり。我、紡ぐものなり。我、汝を…』

…ええと。なんだっけ？…あああああ！…こんなときにとんじゃうんだよなあ…。…ふう。…初の落第者ここに爆誕。…先生には、どこぞの王様みたいに「なにを落ちとるんじゃ！」とか言われちゃうのかなあ？

…とか、あからさまに――危機的状況ではそんなものらしいけど――ふざけたことを考えていると。

――ルヴ…

ん?...どちら様？

―大丈夫...？

ええと。...いいえ。大丈夫じゃないかもしれませんが（汗）

―大丈夫だよ...。今、助けてあげるから...。

―...わたしを望む？

『我、汝を望み、』

―わたしに誓う？

『汝に誓う。』

―じゃあ、応えて？

どちら様が存じ上げませんが、助けてくれるなら喜んでっ！

『我が名はルーヴ・バルドネス！我、汝と永遠まで共にあるなり！』

ブワっとなぎ上がる白い煙が部屋を覆って何も見えない。召喚術ってこんな感じなの！？...じゃ、なくて、多分ボクのせいだね。

はい、分かってます。分かってますとも。

「ルヴ！無事か？」

「あ、はい。…先生。これって失敗？」

「いや、俺もこんなんは初めてでな…」

とか、言ったら視界がクリアになって…んん？…いつ！？

…そこにいたのは、ボーイッシュな跳ねた短めの茶髪。服装は白い振り袖と赤い袴。…つまり…

「ミコ？」

だったわけで。

ブローグ？

「ミコ？」

もう一度、呼んでみる。

「ルーヴ？」

声紋認証オールオーバー。ミコだ。間違えるはずもない。この声は、ミコだ。

「ミコ…か？なんでここにいる？」

その時のコロナ先生は、宇宙人を目撃したみたいな顔をしていた。
…あ、ちよっと面白かったっていうのは内緒だよ？

「あの…」

ミコが胸に手を当てる。

「わたしの魔力とルーヴの魔力が、縫い合わさるように繋がっている感じがします。…つまり…」

つまり？

「わたし、ミコ＝ニーテイルは、ルーヴ＝バルドネスの召喚獣になったようです。」

……はい！？…何この展開！…小説なのか？フィクションなのか

？…そういや、そうか（自己完結）

コロナ先生が口をあんどぐり開けている。こんな顔見たことないなあ。…とか言ってるボクも、相当な変顔をしてると思うけど。

それから2時間後。ボクとミコは、夕日で真っ赤に染まった教室にいた。

なんでも、この異常事態に、先生たちで協議を行うんだって。で、ボクたちは結論が出るまで、教室で待機。ってわけ。

「…ミコはどうやって教室に来たの？」

ずっと気になっていたんだ。でも、自分じゃわからないでしょ？聞いてみないと。

「えっとね、…なんかルーヴの声が聞こえたような気がして、振り向いてみたの。そしたら、…なんかね？困ってるみたいなルーヴがいて、…手を伸ばしてみたら、景色が変わって…」

「それで来たんだ。…でも、どうやって…召喚、…瞬間移動？」

客観的に見ても訳分かんない文章だよなあ。言ってる頭がこんがらがってきたよ。…てか、ボクに分かるわけないよね？

「えっと。…多分、召喚で次元と次元を繋ごうとしたのが、次元を捻じ曲げるみたいになって、サミンスの人…わたしが呼ばれたんじゃないかな？」

「ふん…」

でも、それって…

「…ゴメン。」

「え？」

「要するに、ミコがボクの僕になった…ってことだよね？…これってさ！…ものすごく大変な事じゃ…」

「そ、そ、そんなことないよ！…むしろ、誤らないといけないのは…わたしだよ。」

……はい？

「…なんで？」

「だって、…わたしが召喚されたせいで、試験に落ちちゃうかも、…そうになったら、…わたしもルーヴと一緒に2ndやり直すから！」

「ええ！？なんで、そうなるの！？」

「召喚獣は、常にマスターと共にいるの！」

傍から見たら、変な会話だよねえ。…ただ、申し訳なさそうなミ

コなんだけど、…なんか、喜んでるような…。…単に幼馴染の勘
なんだけどね。

「ルヴ」。

なんて話してたら、協議が終わったみたいで、コロナ先生がやつ
てきた。

「先生たちで話し合ったんだがな？おそろく、次元を繋げるはずが、
次元を歪めたため、こうなった。って結論が出た。」

ううう。て、ことは、やっぱり不合格かあ…。ミコには後で大好
きなチョコバナナのクレープをタップリと御馳走しないと…と思
ってたら、コロナ先生がニンマリ笑った。

「…だがな？召喚は召喚だ。と、言うわけで…。おめでとう！ルー
ヴ！バルドネス！最終試験、合格だ！」

「や、やったあー！」

真っ先に喜んだのはミコで、ボクにギュウっと抱きついてきた。

「うん！ありがと。ミコ。」

…と、自分の行動にいついたのか、顔を真っ赤にして手を離す。
…もうちょっとそのままよかったのに…なあって、ね。

「ゴ、ゴ、ゴ、ゴ、ゴ、ゴ、ゴメン！」

「ううん。…ありがと。ミコ。」

も一回同じフレーズで、ボクはサラフワな髪をなでた。

牡羊の月？

最終試験から1週間経った日の朝。ボクは、寝癖ひどいなあと、か思いながら、シャコシャコ歯を磨いていた。

聖フォーース召喚魔法学校の生徒には、1人1人に個室があたえられるんだ。つまり、親元から離れて一人暮らしをするわけ。もちろん、連休には親元に帰れるんだけど、今回の1週間の春休みでは、進学の準備で大変そうだったから、ボクは学校に残ったんだ。

つまり、今朝。

ボクはボクにしては珍しく、ミコの助けを借りずに自力で起きたんだ！…って、言いたいんだけど…

「ルーヴ、準備できた？」

「ん」。寝ぐせ直さないよ。」

ミコは自室からボクの部屋に来たんじゃないよ。一緒に住んでるの。…なに？不純異性交遊だって？失礼なこと言わないでっ！ボクたちまだ12歳なんだからね！…それに、言い出しっぺはミコの方なんだよ？なんでも、召喚獣はマスターのそばにいるのが使命なんだって。

ブオゥ・・・とドライヤーの音が部屋に響く。ミコがボクの桃色の髪を乾かしてくれてるんだよ。

「ルーヴの髪ってサラサラだね。」

「んん。」

こういうのって、生返事って言うんだっけ？…うん。そんな生返事になったのは、ちよっと考え事をしてたからで。…うん？…うん。ミコのことだよ。

さっき言った通り、春休みが1週間あったんだけど、主従関係―ボクにはまだ実感ないんだけど―になつてからも、ボクとミコの関係は変わってなかったんだ。…でもね？なあ、勘が当たったみたいだね？ミコがいつにもましてご機嫌だなあ、って。なんでもかな？普通、逆なんじゃない？

「終わったよ。」

「あ、…うん！ありがと。ミコ。」

「うん！」

「じゃあ、すぐ着替えるね？」

と、言って、パジャマの上着のボタンを外す。…と、あれ？なんか、ミコ、真っ赤なんだけど。

「あ、あ、あ、あ、あのね？…終わったら、言ってね？」

くるりと振り返ってベッドサイドに座る。

んん？ミコは、物どころついたところからボクんちに住んで、一緒に暮らしてたし、目の前で着替えるなんて当たり前なんだけど…でも、悪い気はしない。

とか、邪混じりなことを考えながら着替えを済ませて時計を見ると、おんやあゝ？

「ねえ、ミコ？…時間、大丈夫かな？」

「え、え？…ああっ！始業式始まつちゃうっ！！」

仰天したミコに次いで、ボクは全速力で部屋を後にした。

牡羊の月？

ギリツギリで始業式には間に合ったんだけど、あんな距離全力疾走するのはやめた方がいいね。心臓爆発寸前。肺臓過労死寸前。足は棒みたいに言うこと聞かないし…。体育会系のボクがこんなだし、ミコは大丈夫かなあ…

「それでは、オルディア校長のお話です。」

お！はじまり、はじまり。

「新人生のみなさん。ようこそ！聖フォーース召喚魔法学校へ！」

聖フォーース召喚魔法学校の始業式では、入学式も一緒にやるんだ。内容は、形式ぶったやつじゃなくて、ただ、校長先生のお話があるだけなんだけどね。

「あなた方には、召喚師の卵として、五年間、勉学に勤しんでいただきたいと思います。もちろん、勉学のみならず、部活動、交友関係の作成、社会的常識の構築など、やらねばならないことは山のようにあります。この時期は、一生に一度だけのかけがえのない時代です。一生懸命に青春を謳歌してくださいね？」

「さて、2nd、3rd、4th、5thのみなさん。あなた方は、立派な召喚師へと続く道を、ゆつくりと、ですが、休むことなく、確実に進んでいます。しかし、それに甘えることなく、先輩として、より一層の努力をお願いします。特に、3rdと5thのみなさんは、大きな転機を迎えています。3rdのみなさんは、実質的な召喚師としての一歩。5thのみなさんは、真の召喚師として巣立つ

までの最後の一年です。悔いを残さないよう、一日一日をかみしめながら進んでいきましょう。」

「それでは、生徒のみなさんに、自分のため。誰かのため。世界のための成長を願い、私のお話とさせていただきます。」

ペコリと一礼して、校長先生のお話は、…んん？…コロナ先生が？校長先生に駆け寄り？耳元で何かを伝えて？…あ、校長先生がパタパタとマイクに駆け寄り…

「ごめんなさい！3rdのみなさんはクラス分けがありますから、残っていてくださいね？」

こういう抜けたところがチャーミングだね。校長先生は。なんて考えて、ボクは小さくクスリと笑った。

「ほい。じゃ、クラス分け始めっか！」

「クラス」っていうのは、2ndで召喚した召喚獣の属性で決まるんだ。火属性は「緋色」。水属性は「藍色」。風属性は「翡翠」。地属性は「黄金」ってね。で、クラス決めはコロナ先生が厳密に…

「お、『木』かあ。藍色か黄金だな。…うん。どっちがいい？」

あ、結構適当だね。

…そういえば、ミコは何属性なんだっけ？

「よし。次、ミコ＝ニータイル！」

「はい！」

と言って、ミコが召喚した橙色の犬を見て、皆がざわめいている。それもそうだね。獣の姿のBクラスは、3rdの最後に召喚するクラスなんだから。

「ん。『レッドハウンド』ね。うん。『火』だから緋色な。」

ミコは緋色かぁ。ボクもそうだったら、…ん？…そういえば、ボクはどうなんだろう？人間に属性ってあるのかな？

「おい。ルヴ。」

「あ、はい！」

「お前は緋色な。」

…願ったり叶ったりだけどさ、…なんか、すごく適当な気が…。
…じゃなくて、これはきつと適当なのだ。

「えっと…緋色でいいんですか？」

「おう！火属性を召喚したミコは、おそらく、火属性だから、お前もおそらく火属性だろう。だから、緋色だ！」

なんか屁理屈っぽいよねえ…理屈は理屈だけど。

「うっっし！んじゃあ、全員、3rdの各クラスに移動な！」

牡羊の月？

「…つうことで、緋色の担任は、俺、コロナ先生だ！知ってるやつはいるだろうが、一応自己紹介しとくぞ！」

コロナ先生は、1st、2ndでもボクの担任だったんだ。なんて言うか、縁があるよねえ。

「コロナ＝クリームラッド！28歳！光の召喚師だ！お前たちのことは、我が子と思って接していくぞ！ちなみに独身！彼女募集中だ！」

親指立てて、ウイंक。

バチコーン！って効果音が適切そうだね。

「さて。お前たちは1stで基礎知識を学び、2ndでCクラスの召喚について学んできたと思う。…が、3rdからは大きな変更点がある！…のだが、それは何でしょう？…ミコ！」

「はい！？」

おお。コロナ先生からのキラーパス！

「…えと。…私達は召喚獣を召喚したことで、魔法が使えるようになりました。…ので、…えと、魔法の使用方法や、戦闘に関する授業が増える。…だと、思います。」

「…ファイナルアンサー？」

「…えと、…はい。…ファイナルアンサー。」

上記のやりとりがわかんない人は、「ミリオネア　みのもんだ
タメ」で検索だ！

「…正解！おめでとう！！」

何が？ってツツコンじゃだめだよ？これは、ようするに完コピと
言うやつだよ。

「ミコの言うように、3rdからは実戦向けの授業が行われる。担
当の先生はミディーオログアザッド先生だ。近いうちに行われる
だろうから、覚悟しとけよ？」

「もちろん、召喚術の授業も受けてもらう。3rdではBクラスの
な。気合入れて打ち込むように！」

召喚獣には、C、B、A、S、SS、SSSっていう六段階のラ
ンクがあるんだ。聖フォース召喚魔法学校の生徒の最終目標は、A。
なかにはSにたどり着く人もいるんだけどね。

C～Sまでは、召喚師自身の魔法レベルが段階的に上がって、戦
闘力も増してくんだ。ただ、SS、SSSは別格で、なんでも神様
に近いそうだよ。詳しいことは、ボクは知らないんだけどね。

「つつても、まだまだ先の話だ。まず、一步目は、召喚獣を手なず
けるとこだな。牡羊の月は、召喚獣とのスキシップに費やすぞ！」

ん。なんか授業っぽくないけど、確かに絆を深めるってのは、
大切だよな。

「あ、ルヴ。お前もミコとの仲を深めろよ?」

ニヤリと笑うコロナ先生に触発されたがごとく、ヒューヒューと声上がる。ボクが起こした異常事態は、学校の皆に広まってるからね。

…いやいや!それでも、教師が言うセリフじゃないって!

なんて、心の中でつつこみをかますボクの隣で、ミコは茹で蛸みたいに真っ赤になってた。

牡羊の月？

「わぁ〜。可愛い〜。」

3rdの最初の授業は、コロナ先生の言った通り、「召喚獣を手
なずけよう！」だった。

でも、さ？ボクとミコの仲は相当のものじゃない？

だからボクは、ミコのお手伝い…という名目で、ミコの召喚獣「
レッドハウンド」の頭をナデナデしていた。…いや。…ほら！ペッ
トに協力してもらって、間接的にとるコミュニケーションである
でしょ？だから、これはそれなんだ。うん。そういうことにしてい
てね？

クーン。と、なでるのをやめたボクの手にもっともっと、とい
うような感じでレッドハウンドがじゃれつく。なんかさ？昔のミコ
みたいだよねえ。…それにしても…

「ルーヴって動物とお友達になるの得意だよね」

「うん。ホントそうだよね。」

そう。ボクは、なんか知らないけど、昔っから動物と仲良くなる
のが得意なんだ。って、言っても、むこうから敵意とか警戒心とか
0%でじゃれてくるんだけどね。

「ねえ、ルーヴ？わたしにも、レッドハウンドを…ひゃあっ！」

なんか素っ頓狂なミコの声に頭を上げると、ミコの目の前に、毛むくじゃらで丸くて目が二つある、白い「まっくろくろすけ」みたいな生き物が、パチパチ音を立てながら、フワフワと宙を漂っている。

「こら！カートン！何やってんだ！」

そこに、第三者登場！

「悪い悪い。こいつ、俺に似て、イタズラっこだな…。」

「あ、いえ。大丈夫ですから、気にしないで？」

「ああ、ありがとな。…ん？」

なんかに気付いた。…っていうか、あれだよねえ。

「あ！あんたミコちゃんだろ？ってことは、あんたがルーヴ？いやあ、面白えこともあるもんだよな？…でもさ？なんか赤い糸で結ばれてるみたいで、素敵じゃね？」

…からかったりする人は結構いるけどさ？こっいうとらえ方した人って初めてだよね。

改めて観察してみると、金色の髪は若干癖があって、笑顔は少年のように、邪っていう要素が一割も含まれてないみたいな感じ。背はボクより低いけど、ちょっとつり上がった目はなんか大人っぽい。

「うん。そうだね。…えっと？…」

「あ、悪い！俺はスカル。スカル〃フィックス！雷の召喚師さ
！よろしくな！ルーヴとミコちゃ…ミコちゃん？」

ミコはまたまた真っ赤でフリーズ。んん？なんでだろ？

牡羊の月？

「おお！ここがルーヴとミコちゃんの愛の巣かあ。」

「え！？や…、ち、違っ…！」

ボクの部屋。詳しく言うと、ボクとミコの部屋に遊びに来たスカールくんは、開口一番そう言い放った。想像出来ると思うけど、ミコは、やっぱり真っ赤な顔で、両手を前に出してブンブンと振っている。

「だって、いくら召喚師と召喚獣の関係つつつても、まだお互い12歳だつつつても、男女が同じ部屋で暮らすつつたら、何かしらが出来上がってるってことじゃん？」

「で、出来上がっ…！？」

「ミコちゃん真っ赤だぜ？ああ、面白え〜」

って、スカールくんがケタケタ笑う。

スカールくんってこんな性格なんだねえ。大人っぽい少年って感じ？

ミコも「そうだよ？」とか言ってもいいのになあ。

「…んで、ウチの家系は、どうも、『光』に縁があるんだってよ。ほら。俺の『カートン』も雷属性だろ？」

あれから約10分あった会話は編集により割愛！ザックリ言うところからかう↓照れる↓笑うのローテーション。業界用語で「画がもたない」のだよ。

で、ボクとスカルくんは、座ってそれぞれのことについてお話してる。ミコは、紅茶を淹れてくれてるよ。

「もしかしたら、コロナ先生もウチの血を継いでたりするのかなあ…。なあんで、な。」

「へえ…。ボクの家系は、そんな特別でもないかなあ。…あ、でも、そういえばボクの母さんは、昔、獣使いだったって言うてたような…」

「マジ！？それ、すっげえ！獣使いつつたら、召喚師の上等種みたいなもんじゃん！…あ、ミコちゃんは？」

「え？…あ、わたしはものごころついたころからルーヴの家で暮らしてたから…」

「…ふん…こんな可愛い子と一つ屋根の下ってか？」

ここからさらに約五分のローテーションが始まりましたとき。なわけで、画が変わるまで割愛！

「…で、ルーヴとミコちゃんは何部？俺はサッカーなんだけどさ。」

「ボクはバスケ。ミコはマネージャーさんだよ。」

「あ、俺もバスケ得意！どっちか迷ってたんだよなあ…。ポジションは？」

「ポイントガード。」

「おお！俺も俺も！バスケん時は。」

「ルーヴは2nd代表のレギュラーだったんだよ。」

「おっし！んじゃあ、体育祭ん時はお互い頑張ろうぜ！…って、ああ！時間やつべえ！」

時計を見ると、うあっち！…授業開始まで後わずか。…っていうか…

「これ、間に合わないよお…。」

ミコはもう半泣きで。どうしよおおお…

「大丈夫！俺、裏道知ってっから！」

牡羊の月？

「ねえ！裏道ってどんななの？」

走りながらミコがスカールくんに見せる。

「ここから教室までの直線に、立ち入り禁止の道があるだろう？そこさ！」

「ええっ！？バレたら怒られちゃうよ！？」

「でもさ、ミコ？授業に間に合わなかったら怒られちゃうわけだから、見つからないのを願って通ればいいんじゃない？」

「おおっ！ルーヴ、お前天才！」

おほめ頂き光栄でございます。

「でも……」

「大丈夫だって！ミコちゃん！」

「……うん。」

……今にして思えば、これが起承転結の「起」であり「転」でもあった。

その道が立ち入り禁止なのは、そびえ立つ大木の根元が朽ちつつあるからだった。その木は、ボクたちの右手側にあって、思った以上に巨大だった。確かに、「ピサの斜塔」みたいな感じで傾いている。…でも、さ…

「なんで、こんなに大きな木が倒れそうになってるのかなあ？」

「ああ。そりゃ、世界樹の力が弱まってるからだつてよ。そのせいで秩序が乱れて、変な輩が現れて…、嫌んなっちゃうよな？」

「世界樹」っていうのは、この世界の中央にそびえ立つ、この世界の魔力・生命・秩序を司る、すっごく大きな御霊樹のこと。その力が弱まってるから、他の生命力も弱ってる。ってことなのかなあ？

「…あ。」

「ルーヴ？どうした？」

「靴ひもほどこちゃった。先行つてて。」

「オツケ〜。行こうぜ！ミコちゃん。」

「…うん。ルーヴも早く…っ！！」

ミコの言葉が途中で止まったな。って思ったら、異変に気付いたんだ。……ボクのしゃがんでるところが、日陰になってるのに。

「ルーヴッ!!」

巨木がボクめがけて倒れこんでくる。

「走馬灯が流れる」って、嘘みたいだね。ボクの頭では、走馬灯なんてそっちのけで、たった1つの「後悔」が繰り返し繰り返し流れていたんだから。

「ああ…、嫌だな…」

…だって、そうでしょ？最後に映ったミコの目が…あんなに悲痛だなんて…

「…ねえ。」

届いたのかどうかなんてサッパリ分からない。けど、気がつくと、ボクは駆け寄るミコに声をかけていたんだ。

「お願いだよ。…ミコ。」

巨木の影がどんどん濃くなっていく。

「……笑って？」

……どれだけの時が過ぎたかな？

半日か。一時間か。十分か。もしかしたら、数秒も経ってないのかな？

痛みが全くやって来ないから、ボクは恐る恐る目を開けた。

……やっぱりボクはあの世に来ちゃったみたいだね。だって、倒れてきたはずの巨木は影すらなく、目の前に立ってる人は、明らかに人間ではないのだから。

「大丈夫？ルーヴ？」

ミコみみたいな声だ。……ああ、これなら、ちょっとは悔いが和らぐかも。

「……ここは、……天国ですか？」

「……ううん。……ルーヴは死んでなんかいないよ。」

逆光で顔色は伺えないけど、絶対嘘だよな？

「嘘だあ。あんなに大きな木が倒れてきたんだよ？」

「あれはね。わたしが燃やし尽くしたの。」

「……え？」

「…ごめんね、ルーヴ。だまって。でもね、嘘でも何でもないの。…だって、わたしは…」

太陽が雲に隠れる。

九本の尻尾と、犬みたいな耳をした、ミコそっくりな…いや、ミコは、

「ナインテール アイルシオンの九尾之狐の幻獣人なの。」

そう言っ
て哀しく微笑んだんだ…

牡羊の月？

「アイル…シオン？」

ボクがミコの言葉を繰り返すと、ミコはコクリとうなずいた。

「ルーヴ！ミコちゃん！無事か！？」

スカルルくんがかけてくる。

「いやあ。危なかったなあ、ルーヴ。ミコちゃんがいなかったら、今頃ぺったんこであの世行きだったぜ？…にしても…」

スカルルくんが、獣耳で獣尻尾のミコを見る。

「ミコちゃんがアイルシオンたなあ…」

…あのさあ。さつきからアイルシオン、アイルシオン言ってるけどさあ…

「アイルシオンって、何？」

「ああ。アイルシオンは幻獣人。文字通り、幻獣の遺伝子を持った、おおそ人間をはるかに超える魔力を秘めた獣人のことだ。…そんな、すべからく特別保護種として扱われてる。理由は2つ。1つは絶対固体数が少ないこと。んで、もう1つが…」

「魔力目的のハンターに狙われているから。」

スカールくんに次いだ、ミコの目は、うつむき加減で見えない。

「ごめんね？ルーヴ。だまって。…騙してたつもりじゃないんだけど、…ほら！わたしが人間じゃないって分かったら、ルーヴとの関係が崩れるような気がして…、あ、はは。…ほんと、自分勝手だよね。」

精いっぱい明るくしようとしてるんだろうなあ。…でも、言葉がフルフル震えてて…、見えなくても…、口元は笑ってても…、今にも泣きだしそうなのが分かるよ。

「だから、さ。ハンターに狙われるかもしれないし、さ。…だから、…契約を…」

「そんなことより、授業始まっちゃうよ！」

「……え？」

そう！なんで二人ともこんなところで話してるのさ！

「ほら！もうちょっとで…ああ！ほんと間に合わないって！行こ！」

「いや、だから、契約を…」

「その話は後で！」

「…わたしは！…人間じゃ、ないんだよ！？」

「…でも、ミコはミコでしょ？」

「…っ！」

「あ、スカールくんも、ミコのことばらしたら絶交だからね！精いっぱい隠してたみたいだから。さ、急ごー！」

かけだしたボクは前を向いてたから、二人がどんな顔してるかは分らなかった。

結局、ボクたちは授業にギリギリ間に合わず、来月から始まるBクラス召喚についての宿題を五割増しにされちゃった。コロナ先生は、優しいけど厳しいのだ。で、連帯責任ってことで、ボクたち三人はボクとミコの部屋で宿題を解いている。

「ね、ミコ。ここは何が入るの？」

「…あ、…そこは、属性によって変わるの。」

「ありがとう。」

「…。」

カリカリ宿題を解いていく。と…

「あのね？」

「ん？」

「何か、…言うことない？」

「？…あ、まだお礼言ってなかったよね！ありがとう、ミコ！」

「そうじゃなくて…」

「？…あ、アイル…なんとかってやつ？嫌だよ？ボクは契約破棄しないから。」

「でも！…わたしは人間じゃ…」

「でも、ミコだよ？…それに、契約破棄したらギクシャクして、一緒に入れないかもしれないじゃない。」

「…いまでもっ…！」

「まだ！ミコはミコ！」

「…いいじゃん？」

だまつてたスカールくんが入ってくる。

「せっかく両思いな関係なんだし。俺も、人の恋路邪魔する気はねえし。」

「え！？…ち、ち、ち、ち、違っ！」

「うん。そっだよな。」

その時のミコは心底驚いてた。珍しく、顔は赤くなかったけど、目がまん丸で。

「せっかく一番そばに入れるんだもん。だから、さ。」

右手を差し出す。

「これからもヨロシク。ね？」

…でも、握ってくれないもんだから、ボクから手をとって握った。

「ヨロシク！」

「…うん。」

ミコの目は、今にも涙がこぼれそうだったけど、

「…ヨロシク。」

おっききよりずっと嬉しそうだった。

牡牛の月？

それから、牡羊の月は何事もなく過ぎて行つた。変わったところと言えば、ミコがそれまでと比べて、さらにさらに嬉しそうな顔をしているってところかな？

スカルくんには、「別に変わってなくね？」って言われるけど、ボクには分かるんだよねえ。…あ、そのスカルくんは、ちゃんと約束守ってくれてるみたい。「種別を超えた愛って燃えるよね。」だってさ。

そんなわけで、今日からは牡牛の月。本格的な部活動が始まる月。…え？…うん。本格的ってのはね？クラス対抗の真剣勝負が始まるってことだよ。

1stと2ndの部活動は、ルールの把握とか、基本的な技術、および、応用法の習得が目的なんだ。つまり、3rd、4th、5thでは、それぞれのクラスに分かれて対抗戦が始まるってことなんだよ。要するに、今日からボクは、緋色のバスケット員として、クラスを勝利に導く使命を得たってわけ。

…あ、それから、今日からもう一つ新しいことが始まるね。…うん。実践的な魔法の授業だよ。

その授業を受けるため、ボクとミコは、例のごとくギリギリで、今までと違う、魔法を扱いやすいように細工された教室に入って、見慣れた金色の癖っ毛の横に座った。

「スカルくん！今日は早いね！」

「…え？」

「本当！いつもはわたしたちと同じくらいなのに。」

「…えっと、…」

んん？…なんか、様子がおかしくない？

「？…スカールくん？」

「あの、…どちら様ですか？」

と、同時に、教室の扉が思いつきり開いた。

「つぶねえ！ギリ！セーフツ！！」

入ってきたのは、…スカールくん！？

「え？…えっ！？」

ミコの視線は、横のスカールくんと、扉付近のスカールくんを行ったり来たり。

「おっす！ルーヴ、ミコちゃん！…お？ハティルも居んのか。」

ハティル？はて、どちらさんでござんしょ？

ボクは、右のスカールくんと左のスカールくんを見比べる。右のスカールくんは…うん。スカールくんだね。左のスカールくんは…んん？…あっ！眉毛の端が申し訳なさそうに下がってる！

「…いつけね！まだ紹介してなかったよな。こいつは、ハティルⅡ
フィックス。俺の弟。」

「…弟！？」

「そ。俺たち双子なんだ。」

「えっ！？…でも、今まで授業中見なかったけど…」

「ああ、ハティルは翡翠なんだよ。俺たちの雷属性は、緋色にも翡翠にも属するからさ。一緒だとややこしいから、別にされたってわけ。」

…うん。コロナ先生の仕業だ。うん。

「じゃあ、なんで今日はいるの？」

「魔法の授業は、緋色と翡翠の合同で行われるからさ。…って、先生来たぞ！」

あわててスカールくんが席に着く。

チャイムと一緒に入ってきた先生は、金髪で顎鬚を蓄え、着ているシャツの上の方をはだけさせた、40代くらいの先生だった。ちよい悪オヤジってこういう感じを言っただろうね。

「みんな揃ってるな？私は、今日から三年間、君たちに実践的な戦闘法を指導する、ミディーオⅡログアザッドだ。言っとくが、私は授業については厳しくやってくつもりだから、覚悟しとけよ？」

牡牛の月？

「…さて。君たちは、召喚獣を召喚し、見事召喚師への道を歩み始めた。そして、それは同時に、魔法使いとしての一步を踏み出したことになる。しかし、魔法と言う術式は、同じく魔力を用いる召喚術とは、その扱い方が全く異なるのだ。…と、うだうだと語っていても、おそらく君たちには理解できないと思う。そこで…」

ミディーオ先生が天井を指さす。そこには、なんかよくわかんない文字が連なられた、円みtainな模様が描いてある。これはつまり、魔法陣ってやつだね。

「この魔法陣は、魔力のコントロールの補助をするものだ。つまり、この部屋では魔法が使いやすいよう細工が施されているというわけだな。…ここまで言うとなんか分かってくれるかと思うが、魔力のコントロール方法を学ぶには、実際に使ってみるのが一番だ。詠唱の方は私が行うから、君たちには魔力コントロールのイメージの把握に専念してもらおう。…それでは始めようか。」

そう言って、ミディーオ先生は、ボクたち1人1人を回り始めた。

先生の言うように、召喚術と魔法ってものは、全くもって似て非なるものらしいよ？

えっと…。具体的に言うと、召喚術は相手に語りかけるように誠実に心をこめて、って感じなんだけど、魔法の場合は、そこに「自然」って言う第三者が加わるから、魔力のまとめ方が変わるんだって。

出来る人はすぐ出来るし、コツを掴めば簡単なんだって言うけど…

…とか考えてたら、クイクイとミコが袖を引っ張ってきた。

「どうしたの？」

「えっと…。あのね…？」

「ん？」

「その、…ゴメンっ！」

…どうして？…えっ？ボクまたなんかやらかしちゃったの！？

「え？どうしたの？いきなり。」

「あの…、実は…」

「よし！ルーヴ！君の番だ！君には『ウィスプ』を唱えてもらおう。」

ミコのことは気になるけど、優先事項は多分こっちだよな。

「はいー。」

まだミコは合掌したままで、何か言いたげだった。その理由は、後々…っていうか、結構すぐ分かるんだけど。

「ポイントは魔力の色が混ざり合い、君の場合、炎の色になるようなイメージを描くことだ。…では、いくぞ？ 『緋色の精よ…』」

ん〜。…ピンクと赤と黄色、かな？ が、混ざってオレンジっぽくなるような…。うん！ 行けるって！

「『御手に集いて、形を成さん』…さあ！」

「炎魔法、『ウィスプ』…！」

…この状態の効果音は、シン…だね。

「まあ、最初はこんなもんだろう。」

ミディーオ先生は苦笑していた。

なんでも、ミコは心底申し訳なさそうだった。

牡牛の月？

「『御手に集いて、形を成さん』」

それから、二周目、三周目、四周目と繰り返すうちに、魔法を使えない生徒が減っていったけど、ただ一人、ボクだけが取り残され、授業が終わっても、欠片ほどの魔法も使えなかった。…というわけで、ボクは、今、居残り授業を受けている。なんでか知らないけど、ミコも相変わらずの申し訳なさそうな顔を浮かべて、ボクのことを見守っている。…あ、召喚獣は、常にマスターと共にあるっていうあれなのかな？

「『ウイスプ』！」

…。

……これで、何度失敗したかな？とりあえず、10は過ぎてるかな？

「…どうした？ルーヴ。しっかりとイメージはしているのか？」

「イメージは、…多分、出来てると思いますけど…」

「ふむ。…どうしたものかな…」

んん…。…ミディーオ先生も困り果てた様子だ。申し訳ないなあ…

「全くもっておかしな話だ。ルーヴ。どれだけ発動に失敗しても、イメージさえできていれば魔力の『流れ』というものを感じるはず

なのだ。…が、今の君とミコくんの間には、流れを全く感じないのだ。…やはり、召喚師といえど、人間であり、召喚獣のようには出来ないのだろうか…」

「人間であり」ってところで、ボクとミコはあからさまにギクリとなったんだけど…、…よかった。ミディーオ先生は、目を閉じて思考にふけているよ。ふう。タッチアウト寸前ギリセーフ。

「…む？…ルーヴ！帰る支度をしなさい！」

時計をチラリと見てミディーオ先生はそう言った。え？もしかして呆れかえっちゃった！？

「え？…ど、どうしてですか？」

「もうこんな時間ではないか！部活動が始まってしまっぞ！？」

「あ、そうですね。…でも…」

「？…なんだ？行きたくないのか？」

「いえ、…ボク、まだ魔法使えてないじゃないですか…」

すると、ミディーオ先生はフツと笑った。

「言ったはずだぞ？『私は授業については厳しくやってくつもりだ』と。」

「はい。…だから…」

「だから。…授業以外のことは圏外なのだぞ?」

…ああ。お堅い先生って言う印象だったけど、…コロナ先生とは違う、経験値を積んでるあったかさだ。

「…はい! すいません! ありがとうございます! …次は成功させますから!」

「ああ。…楽しみにしているぞ?」

ボクとミコは、ペコリと一礼して、部屋を後にした。

牡牛の月？

「…ごめんっ！」

教室を出るや否や、さつき見たいにミコが手を合わせた。

「なにが？」

「その…魔法、使えなかったでしょ？」

「ああ。でも、ミコはちゃんと魔力持つてるんでしょ？だから、それってボクの…」

「違うの！…あのね？…」

そこで言葉が途切れたから、きつと言いたくないんだろうなあ、って思ってたんだ。だから、ボクは「言わなくていいよ」って言おうと思ったんだけど…ミコの方が早かった。

「…アイルシオンの魔力のコントロールは、ちょっと違うの。」

…あ、そういうことね。なるほど納得。

「ボクが魔法を使ったら、ミコがアイルシオンってばれちゃうんだ。」

「うん…。…でも、魔法使えないって嫌でしょ？」

「ヤダ！…あ、魔法使えないのがじゃないよ？ミコが嫌がることを

するのがヤダ。」

「…でも…」

「魔法使えなくても、生きていけるもん。ミディーオ先生の約束破っちゃうけどさ。…それに、ミコがアイルシオンだってばれたら、なんか分かんないけど、まずいんでしょ？ だったら、ボクは魔法使わない。絶対。」

「…うん。」

ああゝあ。朝はご機嫌だったのになあ…

体育館に着いたころ、練習はすでに始まっていた。早歩きできたんだけどね。

「すみません！遅れま…」

って、ところで、誰かの手がガツとボクの頭をわしづかむ。

「初めての練習に遅れるたあ、いい度胸じゃねえか。桃色頭。」

ボクの左に立ってボクの頭を掴んでいる、黒くて長めの無造作ヘアの人は、ガラムールナティア先輩。3rdの試験でSクラスの召喚術を成功させた、超超天才。…なんだけど、なんでかボクには厳

しいんだよね。

「すいません、ガラム先輩。魔法が使えなくて、補習しました。」

「魔法が使えなくて？」

クツと笑う。でも事実だもん。

「まったく。お前にやつくづくガツカリだぜ。あんな問題も起こして……」

「やめてください!」

……ミコが声を荒げるのって久しぶりかも。

「やめてください……ガラム先輩。……ルーヴをいじめないで……。」

そう言ったミコは、悲しんでるような、怒ってるような、困ってるような、ひどく複雑な顔をして、目じりに涙を浮かべていた。

「……チツ。……泣くこたねえだろ……」

やっぱり、女の子の泣って強烈だなあ。ガラム先輩は、すごくバツが悪そうな色で呟いて、背を向けた。

「……悪かったよ。ミコ。……だがな、桃色。」

右目だけでボクを見る。

「……俺はお前を認めねえ。」

…正直、ボクも、ミコを泣かせたこと。ちょっとだけ、許せないんだけど…

牡牛の月？

「おっし。今日はここまで！」

久しぶりの召喚術の授業。3rdでは、2ndよりレベルアップした内容なんだけど、ボクにとっては、魔法の授業よりはるかにありがたいよね。だって、召喚術の授業では、実際に召喚を行うってことはないもん。

だから、いちいちごまかす必要ないし。なんて言ったら、ミディオ才先生に怒られちゃうかもしれないけど。それに、1回実際にやったことあるから、容量は分かってるし。なんて言っても、成績は下から数えた方が早いけど。

まあまあまあ、なにより居残り授業ないから、久しぶりに部活の方にも間に合いそう。ミコも正規マネージャーになったことだし。

…ただ、ね？

「ミコ。行こう？」

「…うん。」

ミコは、ボクとガルム先輩が顔を合わせるのが、心底嫌みたいで…。別に、ボクの方はなんてことないんだけどね。…怖いけど。

シュ…、と投げたボールが、…ツパツ、とリングに吸い込まれるように入る。久しぶりの試合形式の練習だからか、ボクのテンションは上がって、それに比例するみたいにシュートの成功率が目に見えて上がっている。

今日の練習は、学年別に分かれての3on3。…で、ボクのチームは、今戦っているチームに勝てば、見事全勝。ってことになる。

ダ、ダムツとドリブルで切り込もうとすると、さすがに、相手の方も全勝であるためか、素早い反応で、ボクに2枚でマークをかける。…でも、さ？それって、1人が開くってことと同じでしょ？そんなわけで、ゴール下に走りこむボクのチームメイトに、フェイントかけてからのノールックパス！そのレイアップが決勝点となった。

「っし！」

と片手でガッツポーズ。ミコの方を見ると、…よかった。久しぶりの満面の笑みだ。

「あいつ…。ルーヴ…え〜と、バルドネス…だっけ？なんでか知らないけど、上手いよな？」

「おう。…でも、なんでだろ？スピードも並みくらいだし、身長低いし、特別、点取ってるわけじゃないんだけどなあ。」

って、言う賛美に交じって、…殺気染みた痛〜い視線が…。チラっと横目で見ると、目を爛々とさせたガルム先輩が。うっ、怖いよお…

「…ハッ。…こりゃ、天狗になる前に教えてやらねえとな。…おい
！桃色！」

「はい。」

「lon1。やろっぜっ。」

…せつかくミコが笑ってたのに…。

牡牛の月？

ガツンツ、と、ボールがリングに叩きこまれる音が体育館に響く。

「どうした？桃色。これで14点目だぜ？」

ニヤリと笑うガルム先輩。ちなみに、ボクは1ゴールも奪えていない。…っていうか、それもそうでしょ？なんたって…

「緋色の…いえ、学園でもトップクラスのPF相手に、ボクなんか
バワーフォワード
が1人で立ち向かえるわけじゃないじゃないですか。」

「なんだ？そう思いながら挑んだってのか？…大層な自信だな。」

「いえ、断るのも失礼ですから。」

「あ？…ちつ。ふざけたやつだ。」

そう言つて、ガルム先輩は踵を返し、ヒラヒラと手を振った。

「いいか？桃色。これで、テメエの実力つてのが分かったろ？分かつたんなら、もう天狗面すんじゃないぞ。」

トタトタトタとミコが駆け寄ってくる。

「大丈夫？ルーヴ。」

「…ねえ。ミコ。」

「？」

「ボクって、…天狗、かな？」

そんな風に思ったこと、ただの一度もないんだけど…

「…『ブリーズ』！」

静かな三人だけの教室に、ボクの声だけが空しく響く。

「…うむ。全くどういうわけだ？…なぜなのだ？…」

ミディーオ先生は、あごに手を当て、行ったり来たりしながら考えにふけっている。

魔法を使えないボクに、ミディーオ先生は、ありとあらゆる手を尽くしてくれていた。例えば、詠唱を変えてみたり、属性を変えてみたり。「イメージを一新しなさい」って言われたこともあった。け…でも、当然、ボクが魔法を使える事はなかった。だって、ごまかしてるんだもんね。

「む！…そうだ！ルーヴ！」

なんかひらめいたのかな？ やったぞって感じの顔をしてるけど…

「来月に、3rd、4th合同の自然合宿がある。自然の中に身を置き、精霊たちの恩恵を受ければ、魔法が使えるようになるかも知れんぞ？」

「あ、…はい。」

「？…どうした？合宿が嫌なのか？」

「あ、いえ！そんなことはないです。…あの、…ボクに魔法が使えるのかなあ、なんて…」

「なにを言うか！私が保証する！万に一つ！…いや、億に一つ！合宿を終えても魔法を使えなかったとしても！それでも！私が全霊を込め、君に指導しよう！」

ああああ。…熱いなあ…。

チラリとミコを見ると、やっぱり困り果てた顔をしている。ミコにはああ言っただけ。…やっぱり、申し訳ないなあ…。…なんか、打開策。ないかなあ…。

双子の月？

「おお！でっけえ！」

「わあ！ねえねえ。すっごいよお！ルーヴ！」

「うん。立派だねえ。」

聖フォーース召喚魔法学校所有の、魔法列車内。窓から顔を出して、ミコとスカールくんがしゃぐ。

「あれが、ユグドラシルってやつ？」

「そうみたいだね。わたしも、実際に見たのは初めてだよ。」

「自然合宿」っていうのは、3rdと4thが合同で、自然の中に身を置く野外学習の1つ。魔力を司る自然霊と触れ合うことで、魔力を向上させたり、班で行動することで、協調性の確立だとか、集団行動についての常識を学習するんだって。ミディーオ先生が言ってたよ。

で、その合宿場所が、世界樹「ユグドラシル」の下、豊かな湖と森を有する平原。ボクたちはそこに向かってるわけ。

…しかし、ひさしぶりにミコの自然な笑顔を見れるのはうれしいなあ。…なんでそんなにご機嫌かって？…多分、部活と違って班行動だから、ガルム先輩と会う機会が減るため、…だと思う。…別に、ボクはガルム先輩嫌いじゃないけど。ね。

泊まる宿は、ログハウスを巨大化させたみたいな、丸太で出来たペンションだった。ボクたちは、「趣あるなあ」とか言いながら、ボクたちにあてられた部屋を目指す。

「ええつと、お！ここだ！」

スカルくん先導で、部屋の扉を開ける。

「おお！」

「わあ！」

部屋の造りは、5つのベッドと、チェアやテーブルのある、リビングルームとベッドルームを合わせたみたいな素敵で落ち着いたものだった。

「ボクたちの班は、スカルくん、ミコ、ハティルくん、と、ボクで、いいのかな？」

「おう、そうじゃね？良かったよなあ、見知ったメンバーで。」

「なんか、違和感。なんて言うか…ええと、難しいなあ。…例えるなら、シャツのボタンを一個掛け違えてるような、…例えるなら、服の表裏、もしくは前後逆に着てるような…気持ち悪さっていうか…。」

あらためて部屋を見渡し、ボクはあることに気付いた。

「ベッド…5つあるけど…」

「お？…んん？…あと一人いるわけ？…でも、いねえ、けど。」

スカルくんがキョロキョロしていると、ハティルくんが何かに気付く。

「なんか、ちっちゃい音、聞こえませんか？…ノック？」

「え？あ、ど、どうぞお。」

カチャリと開いた扉の前には、緑の目と茶色くて長いパーマに、とがった耳の女の子が立っていた。

「あ、ルーヴさん、ですか？そちらはスカルさん、ハティルさん。あなたはミコさん、で合ってますか？」

「あ、はい。」

ホントのホントにどちら様？

「あ、はじめまして。私、エルフの、レフィィグリュートと申します。よろしく願いします。ね？」

双子の月？

エルフは、汚れ無き森に住み、森を愛でる希少種族。魔力のコン
トロールに長け、

「エルフってことは、精霊と話ができるわけ？」

「ええ、一応。」

そう。この世界の住人の中で、唯一精霊と話が出来る種族なんだ。
つまり…

「これって、自然霊さんたちの恩恵を受けるチャンスじゃないです
か？…ちよつとズルい気もしますが。」

「そうね！レフィちゃんがいると助かるわ！」

「ええ。お役にたてれば何よりです。…でも、」

？…レフィちゃん、なんか不思議そうな顔してるけど…

「なんで、そんなに精霊たちと会いたいんですか？」

「え？…そりゃあ、」

「理由なんてないよお。誰かと仲良くなれたら嬉しいじゃない。」
ん？なんかみんなポカーンとしてるけど、ボク、なんか変なこ
と言ったかな？

「…フフ。そうですね。」

フワってレフィちゃんがほほ笑んだ。

「なあ、レフィちゃん。この子はなんてえの?」

「その子は、アスチルド。悪戯好きですけど、優しい子ですよ。」

「じゃあ、あそこに漂ってんのは?」

「あら!珍しい。あの子はリーフェリー。臆病で中々人前には現れない子です。」

湖のほとりの草原で、レフィちゃん指導のもと、ボクたちは精霊探しをしていた。

「それにしても、レフィちゃん、詳しいなあ。ここで暮らしてるみたいだよ。」

「そうですか?」

うん。本当に、レフィちゃんは、ここの精霊全部知ってるみたい。

一方のボクは、…困っていた。…ううん。精霊と触れ合えないか

ら。じゃ、ないよ？逆。

「レフィちゃん。」

「はい？…まあ！」

ボクの周りには、精霊が群れに群れて、全く身動きが取れない状態だった。

「あの、…みなさん！ルーヴさん困ってますよ！」

ああ、助かった。渋々って感じで、精霊たちは散って行った。

「ルーヴさん、どうやってたらそんなに好かれるんですか？」

「んん。ボクも分かんないよ。昔っから、なんか、動物とかに好かれるの。」

「そうですか。…あ、ミコさん！」

「何？レフィちゃん。」

「ちょっと、ついてきてくれますか？ルーヴさんも。」

「うん。」

どこ行くんだろ？レフィちゃんが、草原の中にわり入って行く。高く伸びた草の壁を分けると、そこには緑の絨毯があった。

「わあ…。ここは？」

「クローバーという草の密集地です。」

クルッと振り返り、コテッと首を傾げる。

「クローバーには、ラッカーという三人組の精霊が宿っているのですが、四人目を見つけてお願い事をする、その願いが叶うそうですよ?」

双子の月？

「みゅゝ。見つからないなあ…。」

合宿四日目。

ヒマさえあれば、ボクは、四人目のラッカーを探すべくクローバー畑へと向かい、緑の絨毯を這っていた。…え？そこまでどんなお願いをしたいのかって？…ほら。最近、いろんなドタバタがあるじゃない？だから、「ミコが笑顔でいれますように」って。…失笑しちゃだめだよ？それでも人並みに傷つくんだから。

「んんゝ…この辺にはいないのかなあ…。」

と、草の壁をかき分けると、

—…誰だろう？—

そこには、黒いスーツに黒いコート。黒いオールバックに黒縁メガネの。つまり、黒ずくめの男の人が世界樹を眺めながら立っていた。

「…どちら様ですか？」

「んん？」

黒ずくめの男の人が世界樹からボクにレンズを向ける。

「…そういうキミはどちら様かな？」

明るめの声色でそう言っつて、黒ずくめの…もう、黒い人でいいか。
…黒い人が尋ねてきた。

「ボク？…ボクはルーヴ…バルドネスって言います。聖フォース召喚魔法学校の…」

「…ああ！…いや、いい。…そうか。自然合宿と言うやつだね？分かったよ、ルーヴくん。」

…自己完結。…会話が途切れ…じゃあ、困るんだけど。

「…で、あなたは？」

「…ああ。そうだったね。…私はジール…ヒールスクール。精霊研究をしているものだよ。よろしくどうぞ。」

言っつて、黒い人…ジールさんが右手を差し出す。ボクはその手を握り返し、軽く握手した。

「ところで、ルーヴくん。君はここで何をしているんだい？他の生徒が見当たらないが…」

「あ、今、課題の合間なんで、ラッカーって言う精霊を探してるんです。」

「？…ラッカー？…それは、どういった精霊なんだい？」

…あれ？

「研究者なのに、知らないんですか？」

「…ああ。…私はまだ駆け出しでねえ。いやあ、恥ずかしい限りだよ。」

と、ジールさんはクスクスと笑った。…なあんか、…変な人だなあ。

「そういうキミは、どうやってその精霊を知ったのかな？」

「あ、レフィちゃん…っていう、エルフの女の子に…」

「エルフ？」

ピクリと眉が動く。纏う雰囲気も、一瞬だけ…ピリっとしたような…。

「?…はい。…あの、それが？」

「…いや。何でもないよ!…む、ルーヴくん。時間は大丈夫かな？」

「え?…ああっ!」

足元の絨毯に似た深緑の腕時計を見ると、…間もなく次の課題の時間で…

「フフフ。急いだ方がいいよ。」

「はい!ジールさん。さよなら!」

あゝあ。今日も成果なし。かあ……。でも、あと三日あるしね。

「…………エルフ……」

——ククツ……—

「とんだ掘り出し物だな……」

双子の月？

合宿最終日。夜。

ここにいるのも今晚で最後だねえ。…明日の朝には魔法列車で学校に帰って…、ああ。忘れてたああ…。ミディー才先生の特別授業がああ……。…ま、それは後々考えよう。うん。

さて、今日が最後の夜。だね？「合宿」、「野外」、「夜」と言えば？…そう！キャンプファイアだよ！…と、言うわけで、今晚は3rd、4thそろって、キャンプファイアを囲んでの夕食会！…で、4thの皆さんはキャンプファイアの準備。3rdの皆は夕食のカレー作りを担当することになって、ボクは今、涙をグズグズしながらタマネギを刻んでいる。…ま、こういうつらい仕事をミコにさせるわけにはいかないしね！……誰か水中メガネもってないかな？

「どうぞ〜。」

一時間ほどの後。

出来上がったカレーをボクは皆に配っていた。

「どうぞ〜。」

「…おう。」

ん？このツンツンした威圧的な声は…

「ああ？…なんだ。てめえか。桃色。」

ガルム先輩。…なんか久しぶりだねえ。…あ、一週間くらいしか経ってないんだっけ？

「…これ。お前が作ったのか？」

「あ、はい！ボクもちよつと手伝いました！」

「…んだよ。てめえが作ったもん食べつかよ…。」

「…じゃあ、ガルム先輩は夕食抜きですね。」

「んなっ！？てめっ！桃色っ！！」

ボクも怒るときは怒るのだよ。

「…おいしいですか？ガルム先輩？」

「…てめえは、不味いカレーに出会ったことあんのかよ？」

あれからさらに三十分。

ボクは、ちょっとしたでも距離を縮めたいと思って、ガルム先輩の隣で、ミコが隠し味にインスタントコーヒー粉末を入れた特製カレーを食べていた。…んだけど、相変わらずガルム先輩はとつても不機嫌。こんな美味しいのにねえ…。

…思えば、前々からガルム先輩はボクに対して厳しかった。…うん。ボクに対してだけじゃない。他の皆に対しても、ガルム先輩は一步…どころか、四、五歩は距離を置いて接している。

「…先輩。」

「あ？」

「先輩は…、どうしてボクに対して、皆と厳しく距離を置くんですか？」

「…んだよ。文章になってねえぞ。」

…あああ…。聞きたいことがプレッシャーからか、タコ足配線ばりにぐっちゃぐちゃに…

「…お前が無能だからだよ。」

グーで柄を握ったスプーンでカレーを一口食べた後、ガルム先輩が返してくれた答えは納得いくものだった。確かにボクは、魔法にしても召喚にしても、全くもって才能が無…

「言つとくが、才能云々じゃねえぞ？」

アイ・サー（はい。分かりました。）

「才能があるうが無かるうが知ったことか。どれだけの努力をしたか怠けてたかなど関係ねえ。…大切なことは無能か有能か。だ。」

「…確かに、ボクは一人じゃ何もできないですけど…」

「だから、無能なんだよ。」

返すボクの答えはバツサリぶった切られた。

「誰かがいつも助けてくれるわけじゃねえ。…一人で出来ねえと意味がねえ…。…じゃねえと…。…誰も護れねえだろ…。」

ガツガツ。と、残りを一気に口にして、先輩は一言「ごっそさん」と言つて立ち上がった。

「せつかくの上手えカレーが台無しだ。…あばよ、桃色。」

…最後の方のガラム先輩の目。…何を見ていたのかな？

「…さて、狩りの時間ですね。」

呟いて私は、紫色に光る、朧月のような生命体。召喚獣ソーウィルを呼び出した。

「『宿り、再び立ち上がれ……』」

――屍魔法『デイスドル』――

双子の月？

「少年は走った！しかし、走っても走っても気配は消えない…」

…んん？いきなり何を語りだしたのだった？「合宿」、「野外」、「夜」と言えば？（使いまわし）…そう！肝試しだよ？…で、雰囲気盛ろうと、コロナ先生が一肌脱いでるわけだよ。…ただ、ボクはこの物語がフィクションだって…まあ、大抵フィクションだけど…分かってたんだ。…なんでかって？…それはね？コロナ先生がカレーを食べながら考え事にふけり、時々ニヤけてたところを見てたからだよ。…その時は先生がどこぞの世界にトリップしてしまったのか、心配で仕方なかったけど。

先生の話は簡潔にまとめると、この森は昔戦場で、そこに迷い込んだ一人の少年が幽霊におびえながら逃走するっていう、…言っちゃ悪いけど、ありきたりなストーリーだった。…で、今まさに…

「少年が足元をみると…そこには、…何本もの人の腕…」

「キヤアアッ！」

…そういえば、ミコはこう言うのに弱いんだよね。

悲鳴を上げて抱きついてくるミコをなだめながら、ボクは密かに「役得役得」と心の中で呟いていた。…そこっ！変な目で見ない！

「ルーヴウ…」

「大丈夫だよ。お化けなんていないんだから。」

「でもおお…」

…うん。とりあえずミコには、そういうウルウルした上目使いが乙女の必殺技だってことを教えておこう。うん。特に、ミコのは精神属性の極大魔法より威力高いだろうしね。

「…本当に仲がよろしいですね。ルーヴさんとミコさんは。」

…なんてことを考えていたら、隣に座ったレフィちゃんが声をかけてきた。

「うん！ボクとミコは幼馴染だからね！」

「フフ…。と、言うよりも恋人同士みたいですよ？」

ん？この展開は…

「じ、恋…！？」

プシュウウウ。って音が聞こえるみたいに、ミコ、オーバーヒート。…からの…。システムフリーズ。ただ今システムの回復中でございます。

「ミコ…。ルヴ…。」

お？遠くでコロナ先生が呼んでいるね。

「あ、ボクたち行くね？」

「はい。…ルーヴさんはミコさんと一緒にですか？」

「うん！コロナ先生が気を使って、…興味本意で手をまわしてくれ
たみたいで。…レフィちゃんは？」

「私は、バンシーさんと一緒に…。」

「ふうん。」

…誰だろ？…4thの人かな？

「じゃ、またあとでね！」

いまだ復旧にいたらないミコの手を引いて、ボクたちは森の中へ
踏み込んでいった。

「キヤアアッ！」

「大丈夫だよ。マネキンだから。」

「イヤアアア！」

「大丈夫だよ。コンニャクだから。」

森に入ってから十分ちよつと。大体、今の繰り返しだよ。今の口
ーテーションだよ。…ボク？…ボクはお化けなんて信じてないから
ね。…おばけなんてないさ…ってね。大体お化け役で出てきた人た
ちの顔も知ってるからね。…おばけなんてうそさ…ってね。……な
んて油断していたら…

ードゴアアアツ…ー

「キヤアアア！」

「うわっ！？」

…今のは不測の事態だよ。どこの世界の流行語をまねると「想
定の範囲外」だよ。

「ハッ！なあんだよ。腰が引けてるぜ？」

…目の前で火柱が上がって驚かない人がいたら拝みたいですよ。
ガラム先輩。

「魔法なんてズルいじゃないですか。」

「いんだよ。最後まで派手にやったほうが。」

…はいはい。そうですか。……ん？

「…最後？」

「あ？…お前からで最後だろ？」

「レフィちゃんと…バンシーさんは？」

「レフィ？バンシー？…誰だそいつら？」

…おかしい。…おかしくないはずがない。…なんだ、この気持ち…
ち…

—キャアアア—

「お？もう一組いんのか。その…レフィってやつと、バンシーとか言うやつか？」

…ああ、そうだ。この気持ちは…

エマージェンシー
危機感……！

気付くと、ボクは走りだしていた。

双子の月？

「ハッ…ハッ…ハッ」

ボクは真つ暗な森の中を、悲鳴が聞こえた方を目指して、ただひたすらに走り続けていた。

―おかしい。…そうだ、おかしい。…絶対に！―

ガルム先輩がバンシーとか言う人を知らないことも、レフィちゃんが肝試しのメンバーから外されたいたことも。

……だとしたら…

「レフィちゃん…っ」

が、危ない！

木々の壁が消えた先。そこには、それと坂を足して半分に割ったような傾斜の崖。その崖の下には、まるで作り話にでてくるような…いや、ついさっき聞いた作り話そのものの光景が広がっていた。

白く朽ちた骸の群れ。それに1人のエルフの少女が囲まれている。

こんな状況下でも、コロナ先生の話はノンフィクションなんだ！
と、思えるボクの脳みそは結構な大物だ。天晴れ！…いや、テンパ
れ！

「っ…レ、レフィちゃん！」

「ミコさん！ルーヴさん！」

後から追いついたミコの声に、レフィちゃんが応える。…その副
音声に「助けて！」を含んで。

…でも、どうする？…ボクは魔法が使えない。今、ボクが飛び込
んでも、あの白い群れに襲われてお終いだ。…その時。

「どけ！桃色！」

こんな時でもぶっきらぼうな態度で、勇者様^{ヒーロー}。あるいは、救世主^{メシア}
様、ガルム先輩が登場！…ああ、助かった。助かったから、先ほど
の不満は心の奥に二重ロックをかけてしまっておこう。

「俺があいつらをフッ飛ばす！いいか？桃色！お前は、そのこの嬢ち
ゃん守つてろ！」

アイ・サー。マイ・ヒーロー！（分かりました。勇者様！）

「いくぞ。…クリムガルム！」

真紅に燃える魔狼が現れ、爆炎が連鎖するように骸の群れを飲み込んでいく。ガルム先輩の方も、小爆炎魔法「ブラスト」を連発。次から次へと白い敵ははじけ飛んでいく。いいぞいいぞ！勇者様！…とか、思ってたなら。

「チっ…キリがねえっ…！」

はじけた骨片が集まり、再び立ち上がる。これはまさに「なんとかハザード」！

「ガルム先輩！この群れは、屍属性の魔法から生み出されたものだと思います！屍魔法の対象物は、存在がある限り再生します！…だから、極大魔法で焼き尽くしてください！」

そうだ！ガルム先輩はSクラスだから、極大魔法が使えるんだ！ミコの脳内ウィキペディアからはじき出された解答は、ボクにはどこの牧師さんから聞くよりも上等な救いの言葉に聞こえた。

「バカ野郎っ！こんな困まれた状況で、極大魔法の長ったらしい詠唱なんか出来るかっ！」

…前言撤回。死刑宣告でした。…いや！ガルム先輩は爆炎の使い手だから、小魔法でも確実に消滅はしてるはず！このまま粘り強く続ければ…

…と、ここでボクは不都合な真実とやらに行きあたってしまった。…RPGゲームをプレイした人は分かるところ。

……魔力切れと言う限界点……

ガルム先輩の魔力がいつ尽きるかは分からない。もしかしたら、間に合うかもしれない。…でも、…間に合わなかったら？

—どうしよう！—どうしよう！—どうしよう！—どうしよう！—

心音が跳ね上がる。ボクはただひたすらに1つの単語を繰り返していた。

「…ルーヴ。」

多分ミコも気づいたんだと思う。カチカチと歯の根を鳴らすボクにミコが呼びかけたんだ。

「…行こう。」

その瞳があまりにも、…怖いくらい、…哀しいほどに、強くて。…ボクはミコの手をとった。

「『紅き精よ、爆ぜろ…』 『ブラスト』！… 『ブラスト』！… チっ、くそっ…」

いまだに前線で抗うガラム先輩に、

「どいてください！」

「あ？…何言っ…」

「どいてください！！！」

「おうっ！？…お、おう。」

ミコのハイパーボイス！ガラム先輩はひるんだ！

「…考えないで。ただ、信じるの。…ルーヴは魔法が使える。…直観的に感じて？」

「…信じる…。…直観的に…」

ボクは、ミコの言葉を反芻していた。

「ボクは、魔法が使える？…ボクは、…魔法が……使える！」

その時、ボクは魔力の流れって言うのを初めて感じた。…いや、

濁流と言った方が正しいと思う。まるで、心の中で気体状態の虎が暴れてるみたいなの。やがて、1つの名前が頭をかすめる。

――極大炎魔法……――

「『クリムヘル』」

ボクの視界は赤い灼熱で覆い尽くされた。

双子の月？

ガタンガタンと不定期なリズムを刻む列車の中。ボクは、開けばなしの窓に頬杖をつき、どんなお化け屋敷よりもクリティカルなインパクトを与えてくれた、悪夢の夜の出来事をリフレインしていた。

「ハッ…ハッ…。…ビックリしたあ。」

…え？感想が違うんじゃないかって？…いや、だって考えてみてよ！自分の手の平から爆炎が出てきて、なんか良く分かんない骸骨の群れを焼き尽くしたんだよ？これに勝る非日常的体験ってないでしょ？…多分、ボク、今とっても変な顔してると思うよ？鏡があったら見てみたいなあ…。

ふと、ガルム先輩の方をしてみる。…これほどデジカメを欲しがったことはないね。パシャリと撮って、保存しておきたいくらいだよ。…でも、こんなことガルム先輩に知られたら怒られるだろうなあ…。さっきの二重ロックの金庫の中にしまつて、パスワード付きの力ギをかけておこう。うん。そうしよう。

…でも、ガルム先輩の仰天ポイントは、ボクのとはずれているみたい。どこにビックリしてたかって？…それはね？

「…なんで、…極大魔法だぞ！？…詠唱抜きで唱えられるわけ…
…SSクラスの召喚師じゃねえと、…出来るわけ…」

「…出来るんです。ルーヴは。」

「……っ！……おい…まさか、…ミコ。お前っ…」

「…そうです。」

ミコは、こんな時ですら愛おしくくらいに可愛いと思える、獣耳と九本の尻尾を出現させた。

「私は、ナインテール九尾之狐の幻獣人。アイルシオン…SSクラスの召喚獣…。」

酸素を欲しがる金魚みたいに口をパクパクさせるガルム先輩。今日はホントに物珍しいものが見れる日だ。何年寿命が延びるかな？…って、こんな時でも能天気なボクの脳みそめっ！ミコの正体がバレちゃったんだぞ？これって大変なこと…、…なのか？…そういえば、なんでミコがアイルシオンってバレたらダメなんだっけ？…ええい、中身の詰まってるボクの脳みそめっ！…とか、考えたり百面相したりなんかしていると…

「みんな！無事か！？」

「…コロナ先生！」

が、またまた珍しく、神妙な面持ちで…こんな時にふざけてもらっても困るけど…やってきた。そのままの顔つきで、一通り、顔色一つ変えずにボクから見渡して…

「ルヴ、ミコ。…これは、お前たちが？…いや、そうだろうな。
…ああ、これですべてがかみ合う。」

そのまま、目線をボクに向けて…

「覚悟するんだ、ルーヴ。…お前とミコは、…今までのままではい
られない…」

その時は、なんぞのマンガの二コマみたいにやたら辺りが静かにな
って…。視界も白と黒の二色になったような気がしたよ。時が止
まるってこういうことを言うのかな？別にボクは「なんたら・ザ・
ワールド」とか使えないけどね。

で、今に至るわけなんだけど。…いまだに、事態を理解できてな
いわけで。…ただねえ。ミコの暗い顔は、夢も希望もありません
て訴えているみたいで。…これから先。何が起きるんだろうねえ…

ボクは、そんなことを不安に思ったりしながら、チラリと深緑の
腕時計を一瞥した。

蟹の月？

「今日の天気は、曇りのち雨です。」

今朝の天気予報は、ド真中ストレートにぶれなく的中したようで、ボクの視界には重々しい鈍色が広がっている。

学校に戻った後に、ボクは先生からすべてを聞いた。

アイルシオンってのは、SSSクラスの召喚獣。つまり、神獣と人間との間に生まれた「半神獣人」であること。その個体数は両の指で数えられるほど少ない、超々希少種であること。そのために、裏のブローカーの間で取引されていること。ゆえに、常にハンターに狙われていること。そして、召喚獣は一人の召喚師としか契約できないこと。

そうして、すべてを理解したんだ。

なんでミコが自分の正体を頑なに隠していたか。なんでボクとの契約破棄を望んだか。

そして…、…ボクの命が狙われるであろうという現実…。

当然、先生たちの提案は決まっていた。ボクとミコが契約を破棄し、ミコを保護が行き届く場所に引き取ってもらおう。と。

「ルーヴ？ご飯出来たよ？」

「…うん。」

生返事をするボク。それをとがめないミコ。そう。ミコの半分は優しさで出来ているのだ。

席に着くと、テーブルにはミコ自慢のタマゴサンド…が、一皿。ミコは食べないのか尋ねると、

「お腹。すいてないから。」

って笑った。その眉の根がつり上がるように歪んでいて、ボクは涙が流れないうちにタマゴサンドを口にした。

「ごちそうさま。」

「はい。お粗末さま。」

そうして、空のお皿を持っていくミコの後ろ姿を、ボクはおもちゃを取り上げられた子供のような目で見ていた。だって、…これが最後かもしれないじゃない…。

「ミコのいない世界」。それは、どんなものなんだろう？…考えたこともなかったから、想像しようにも出来そうにないよ。…思えば、物心ついたところからミコは隣にいたんだ。…そう、ほとんどボクが始まったところから…

「この子はミコ。今日からウチの家族よ。ちゃんと守ってあげるんだよ？」

「…ツキンっ」

「…ねえ？ミコ。」

「なあに？」

「ボクと初めて会った日のこと…覚えてる？」

「もちろん！…あの時、寒がってた私にブランケットを持ってきてくれたよね？」

「…よく、覚えてるね。」

「うん。…ルージュのことはなんだった。…初めて会った日も、何となく口ずさんだ歌の歌詞も、…一緒に遊んだ草原の、若草の香りだっけ覚えてる…。」

「…ミコはさ、…なんでボクン家にやってくるようになったの？」

小さく雨音が聞こえ出した。本当によく当たる天気予報だなあ。

「うん。…確か、あの日も、…雨が降ってたよね…。」

—サ
ア
ア
ア
…
…

蟹の月？

「ミコ。お風呂の用意をお願いしますか？」

「はい！お母さん！」

そのころ私は、お母さんとお父さんと私の三人で、小さな村の静かな森の中で暮らしてたの。

「ただいまあ。」

「あ！おかえりなさい！お父さん！」

そう言った私の頭をなでなでして、お父さんは独特の訛りの入った口調で、ええ子にしまったか？って聞いたの。私が、うん！って答えると、ええ子ええ子って笑ったわ。

「ヒサラも、変わったことは無かったか？」

「ええ。何も。」

「ほうか…。ほんなら、えかったわ。」

お父さん、「レイミョウグレイメン」は、雪のような白いセミロングストレートと、空のような水色の目をした、「神語り」っていう、神様を鎮め、神様の声を代弁する役目を担ってたわ。

お母さん、「ヒサラ」は、夜闇より暗い黒のロングストレートと血紅より深い赤の目をした、神獣、「九尾之狐^{ナインテール}」だったの。

その間に、私、「ミコ」グレイメン」は生まれたの。「ミコ」っ

て名前は、別世界の神様に仕える女性のことで、お父さんのお仕事と、お母さんの位くらゐから付けたそうよ。

お母さんは変化魔法が得意で、私達の前ではいつも人の姿をしていたわ。それでも、正体がばれたらいけないから、お母さんと、一緒にいる私はあんまり外には出れなかったの。

そのころの生活は、何気なく何でもない毎日の繰り返しで、とてもじゃないけど、売り物になるような時間ではなかったわ。それでもね？いくらお金を出されても、とてもじゃないけど、譲れない時間だったの。

「こんにちは。」

「はい。…あら！セレティア！お久しぶりですね。」

その日の最初のお客さんは、「セレティア」バルドネス」。そう、ルーヴのお母さんよ。そのころは、今と違ってオレンジの髪は短めだったけど、セレティアおばさん！って言った私のほほを、むにいつて引っ張って、お姉さんでしょ？って見せた、イタズラそうな笑顔は今と全く変わってなかったわ。

「今日は、どうしてこちらへ？」

「別に用と言う用はないんだけどね。たまたま近くに來たから寄っ

てみただけよ。…ま、あんたが元気してるか気になったってのは確かだけだね。」

お母さんから聞いた話では、昔、セレティアさんは、ハンターに追われて傷ついたお母さんを、かくまって手当てしてくれたそうよ。それでセレティアさんは、たまに私の家を訪ねて、お母さんの様子を確認していたの。

「…で？相変わらず人目を避けて暮らしてるってわけ？」

「ええ。でも、仕方のないことでしょう？」

「ま、確かに仕方はないけどね。…あんたもレイミヨウさんもミコちゃんも大変だねえ。」

「フフフ。でも、あなたと一緒にになった、シャローナさんほどではないと思いますよ？」

「…シャローンのやつが亭主関白つてのもおかしい話でしょ？」

「フフフ。それもそうですね。」

その光景があまりにも微笑ましくて、その時の私には、それまで晴天だったその空が雨模様になると思わないように、あんなことが起きるなんて微塵も想像できなかったの。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1439m/>

ルーヴのアイルシオン

2010年10月25日11時52分発行